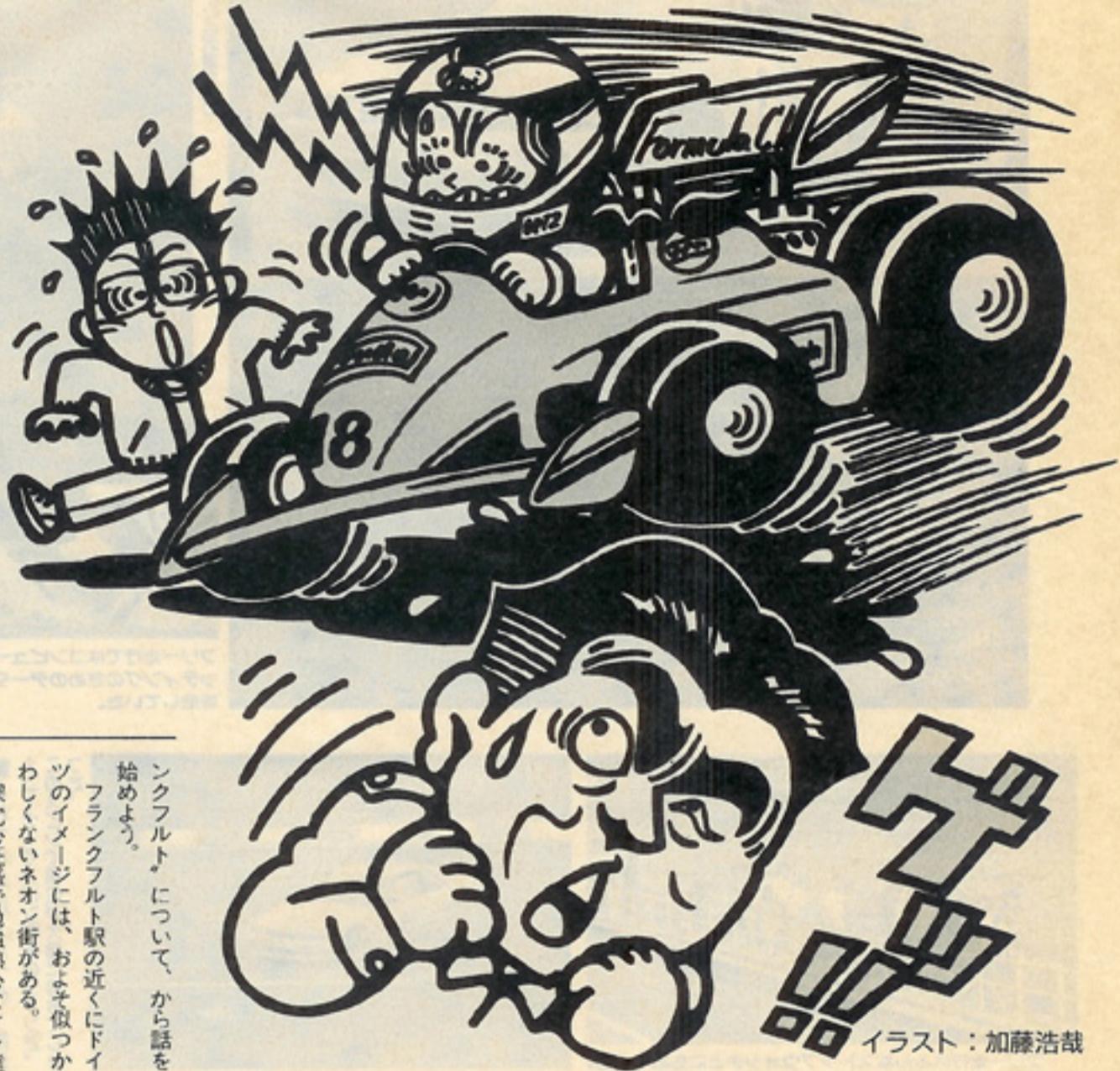




マッキー牧原の“なにわの チューニングストリー”

好評連載!

1992,1 OP2



イラスト：加藤浩哉

チューイング業界には色いろなタイプの人間がいるが、ひとつだけ共通していることがある。それは、外観と内面は必ず相反しているということ。そんなチューイング業界の面々が集まつてヨーロッパのチューイングファクトリーの視察旅行に出掛けた。表向きは視察旅行だがメンバーがメンバーだけに何事もなく終わるとは思えない。さて、どんな珍道中だったのやら……。

ついに
免停確定！

前号に書いた通り、9月中旬、ドイツのフランクフルトショーに行つてきたのだ。どんなショードだったかはOPT本誌の12月号に載つているから、そっちを読んでチヨーダイ。

「フランクフルト駅の近くにドイツのイメージには、およそ似つかわしくないネオン街がある。探求心旺盛で勉強熱心なオレ達は、ネオン街の真夜中を探検しに出てきた。まあ早い話がスケベな

時ついに免停が確定だ。

初期ならしも終わっていないN-S-Xをドライブ中、3車線の道路で信号で止まつた。左隣にシリビア、右隣にはZ-32が並んでいた。

「…オレのはまだ100キロも走つてないんだから、バトルなんてせんぞー……」と平常心で構えていたが、交差する側の信号が青から黄色に変わつた途端に両サイドで空吹かしが始まつた。

「い・いかん・・誘惑されそ уд……」オレは自分の中のもうひとりの自分と戦つていた。しかし、対面の信号が青に変わつた瞬間、オレはもうひとりの自分にあつさりと負けていた。正確には信号が変わる前にすでに負けていたのかかもしれない。なぜならば、いつの間にかT.C.SのスイッチはOFFになつてしまつたし、ギヤーもローにホールドされていたからだ。

オレのブーストは一気に正圧に！
「一回だけイツタれ」ってな勢いで床が抜けるほどアクセルを踏みつけた。一速7,000rpmで2速にシフトアップ、3速に入れながら余裕のヨツちゃんとルームミラーで後ろを確認した瞬間、白いバイクが死角に入るのが見えた。
『ヤ・ヤバイ』オレはバニツクブレーキを踏んだ。しかし、バニツクブレーキが何の役に立とうか、当然スピードの計測は終わっているのだから……。後は免停へまつしぐらだ。

円弁償します」という警約書にサインさせられる。そんやヤツいるのかよ、などと思いつつ、東大阪店と南大阪店に分かれて対抗戦の開始だ。

まず、手始めに南大阪店のバチンコ狂山田が勢い余ってコースアウト。そのまま土手を登っていくという派手なバフォーマンスを見せてくれた。なかなかファンキーなヤツだ。

彼は退場を命じられた。「普段乗っているAEIOUとは全然勝手が違う!」などとワケのわからぬ言い訳で抵抗したが無駄だったようだ。

次に魅せてくれたのは東大阪店の元アルバイトGAL、小松(現在女子大生)だった。

彼女はタイムアタックの後ピットロードに入ってきた。(ここでのオーミュラクラブはゴールライン

轟音がピットにこだました。
マシンが半分がなくなっていた
——小松は？——コクピットの中で(その場を「まかすため)立いていた。フリをしていた。
彼女も60回ローン俱楽部へ加入了したことは言うまでもない。
芸達者揃いのトライアルは来年もきっと楽しいだろうなあ。
——あうあ（溜め息）——
オレもそろそろ車のことを真面目に書きたい！連載が始まつて4回目だというのに、一度も車の話を書いたことがないという寂しい状況なのだ。でも、こういう連中がトライアルにいる限り、いつになつたら書けるのやら……。